

実親に対する子の「介護意識」の概念分析

—Rodgersの概念分析の手法を用いて—

真壁五月¹⁾*・矢嶋裕樹¹⁾・沖本克子²⁾

1) 新見公立大学健康科学部看護学科 2) 岡山県立大学保健福祉学部看護学科

(2022年9月21日受付、11月16日受理)

本研究の目的は、実親の介護に対する子の認知・意味づけの観点から、日本の家族介護に関する研究における「介護意識」概念の活用状況を分析し、その構成要素を明らかにすることで、看護に関する知識をさらに発展させるための手がかりを得ることである。国内の主要な文献データベースから「介護意識」をキーワードとして得られた52文献を分析対象とし、Rodgers (2000) の手法を用いて概念分析を行った。結果、実親の介護に対する子の「介護意識」の属性として、5つのカテゴリー【情愛】【義務・責任】【報恩】【世間体】【自身の介護への期待】が抽出された。先行要因として【子の個人的背景】【家族の歴史・家族関係】【生活環境からの影響】が、帰結として【在宅介護を志向する】【高齢者福祉サービス利用への心理的抵抗感と利用抑制】【介護を優先し仕事を調整する】【介護継続意志を支える】【介護者の身体的・精神的健康への影響】【介護できない場合、葛藤する】が抽出された。実親の介護に対する子の認知・意味づけの観点から現時点での「介護意識」を定義し、「介護意識」が表現されたモデルケースを提示した。

(キーワード) 介護意識、概念分析、Rodgers、実親、子

はじめに

わが国の65歳以上の高齢者は、2021年6月1日現在3632万5千人(高齢化率29.0%)¹⁾であり、介護保険制度導入時の2000年(平成12年)の2200万5千人(高齢化率17.4%)²⁾の約1.7倍となっている。介護保険制度は、介護を社会全体で支え、介護離職ゼロをめざすことを目的として2000年に創設され(厚生労働省)³⁾、令和元年度(2019年)の要介護(要支援)認定者数は669万人に達し、サービス受給者数の1か月平均は567万人となっている⁴⁾。その一方で、介護認定を受けていながらサービスを利用していない人は約102万人(15.2%)も存在し、サービス利用内容も67.7%が居宅サービス利用⁴⁾であることから、多くの家族が在宅で高齢者の介護を担っている。主介護者は2001年(厚生労働省)⁵⁾には、配偶者25.9%、子の配偶者22.5%、子19.9%であったが、2019年(厚生労働省)⁶⁾には配偶者が23.8%、子の配偶者7.5%、子20.7%となり、子の配偶者による介護は約3分の1になり、子による介護が増加している。要介護高齢者数の増加に伴い、主介護者となる子の実人数も増加していると推測される。

介護者の状況について、総務省による平成29年就業構造基本調査⁷⁾の結果をみると、介護を担っている15歳以上の者は627万6千人で、うち有業者は346万3千人(うち、雇用者は299万9200人)、無業者は281万3千人となってい

る。雇用者299万9200人のうち、130万6千人は非正規雇用者である⁷⁾。また、介護保険法の改正が繰り返され、様々な方策が打ち出されているにもかかわらず、高齢者数の増加を背景に、過去1年間に「介護・看護を理由に離職した者の人数」は平成29年(2017年)が9万9千人と、前回調査の平成24年(2012年)の10万1千人とほぼ変わっていない⁷⁾。このように日本の高齢者介護は今もなお、離職した家族の献身によって支えられていると言える。

日本の家族介護に関する研究において、家族のもつ高齢者介護への思い、介護の認知の仕方は「介護意識」という言葉で表現され、介護意識が強い場合、在宅介護の意向が強くなる^{8)~10)}、公的介護サービスの利用が少なくなる¹¹⁾、介護者のうつ傾向が高まる^{12)~13)}、高齢者虐待のリスクが高まる^{14)~15)}など、さまざまな影響が生じることが指摘されている。しかし、「介護意識」という概念は使用範囲が広く、共通する定義が未だ存在しない。例えば、大和¹⁶⁾は、自分の介護(介護される立場)、親や配偶者の介護(介護する立場)、一般論としての介護という、立場によって異なる3種類の「介護意識」があると指摘している。また、藤崎¹⁷⁾は、介護に対する主観的要因が「介護意識」として一括して表現され、その指標に、①介護状況についての認知・意味づけ、②介護についての欲求水準、③介護に伴う負担感・ストレス、④介護継続意志の4つがあり、その中の①介護状況についての認知・意味づけ、すなわち、介護役割を

*連絡先：真壁五月 新見公立大学健康科学部看護学科 718-8585 新見市西方1263-2

中心となって担っていることを介護者自身がどのように意味づけているかが介護意欲を直接的に規定する重要な要因となることを報告している。このように「介護意識」は、わが国の家族介護の実践と研究において重要な概念であるにもかかわらず、「介護意識」という言葉を活用しようとする場合、その定義の曖昧さという概念上の問題が存在する。

以上のことから、実親の介護に対する子の認知・意味づけの観点から「介護意識」を明らかにすることは、今後の家族介護の実践と研究に寄与し、高齢者の介護を担う子の心身の健康を支えるための、あるいは介護と仕事の両立を可能にするための方策立案の際の手掛かりを得ることにつながり、看護に関する知識をさらに発展させると考えられる。

1. 研究目的

本研究の目的は、実親の介護に対する子の認知・意味づけの観点から、日本の家族介護に関する研究における「介護意識」概念の活用状況を分析し、その構成要素を明らかにすることで、看護に関する知識をさらに発展させるための手がかりを得ることである。

II. 研究方法

1. 概念分析の方法

実親の介護に対する子の認知・意味づけの観点から「介護意識」のコンセンサスを確認し、共通する特性を明らかにするために、Rodgers⁽¹⁸⁾⁽¹⁹⁾が提唱した概念分析の手法を用いた。具体的な分析の手順については、この概念分析の手法を用いた概念分析の事例としてRodgers自身が推奨している文献のうち、2語以上から成る概念を分析した3文献も参考とした^{(20)~(22)}。

Rodgers⁽¹⁹⁾によれば、歴史的に本質主義を哲学的背景として定義された概念は、普遍的なもの(変動しないもの)、不変のものとして、その定義は時間の流れや文化、社会の変動などの影響を受けない一定のものであるとされている(p.77)。しかし、このアプローチ(Rodgersの概念分析の手法)は「概念は動的であり、時間の経過とともに進化・発展する」という哲学的立場に基づき、概念の性質は文脈(学問分野、社会、文化など)によって、また歴史的変動すなわち時間的な経過にそって変動するという立場に立つ(p.91)。概念は単なる言葉や表現ではなく、その言葉の背景にある心理的なクラスターであり、特定された単語を使って表現される考え方であることに注意することが重要である(p.79)。その概念の表現方法、概念の一般的な使用方法(その概念が今現在どのように使われているか、そこに共通する特性:p.83)を分析することによって、概念を

構成する属性(Attributes=Definition定義)のクラスター(構成要素:p.83)を特定し、概念を定義することができる(p.80)。概念の定義を構成する属性のクラスターは概念分析を行うその時点のものであり、概念が使用されていく過程で時間の経過とともに変化する可能性がある(p.81)。

本研究で分析を試みる、実親に対する子の「介護意識」は比較的新しい概念であり、少子高齢化が加速度的に進み介護保険制度の改定が繰り返される現代の日本では、今後もその属性が変化し続ける概念であると考えられる。また、2語から成る概念であり、本質主義に基づく分析方法ではなく、現象学的なアプローチが望ましい⁽²¹⁾といえる。したがって、本研究ではRodgers⁽¹⁹⁾の提唱する手法を用いて、実親の介護に対する子の認知・意味づけの観点からの「介護意識」を概念分析することとした。

2. サンプル収集方法

実親の介護に対する子の認知・意味づけの観点からの「介護意識」のコンセンサスを確認し、共通する特性を明らかにするために、またその動向を明らかにするために、①2020年末までに公表され、②研究の主要な概念として「介護意識」を用いている、③「介護意識」という概念がよく使用されている看護学分野、介護・社会福祉学分野、社会学・心理学分野の文献をデータとした。キーワードを「介護意識」とし、3種類のデータベースを用いて発表年を限定せず文献検索を行った。その結果、医学中央雑誌Web版Ver.5で104件、CiNii Articlesで121件、J-Stageで109件の合計334件が検索された。このうち、会議録・抄録85件、重複51件、書評・入手不能の図書13件、掲載誌に査読規定のない2件を除く183件を抽出した。さらにタイトル・抄録から日本の家族介護における実親の介護に対する子の認知・意味づけに関する文献を検討した結果、103文献を抽出した。その後本文を詳細に読み込み、本研究目的に一致する52文献を抽出した(図1)。Rodgers⁽¹⁹⁾は概念分析にあたっては各分野30件または各分野の総論文数の20%のいずれが多い方のサンプル数を推奨している。実親に対する子の

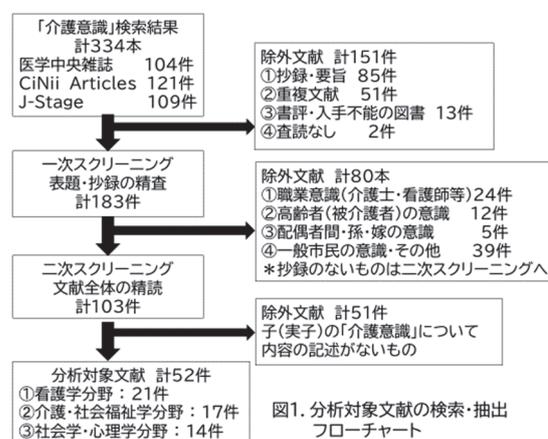


図1. 分析対象文献の検索・抽出フローチャート

「介護意識」に関する文献は看護学分野21件、介護・社会福祉学分野17件、社会学・心理学分野14件といずれの分野も30件未満であったため、検索されたすべての文献を分析対象とした。いくつかの文献は、掲載誌が上記3分野以外であったり、著者の所属の詳細な記載がないものもあったため、筆頭著者名をインターネット上で検索し、その研究分野を確認して3分野のうち最も近い分野に分類した。なお、社会学分野と心理学分野の文献は本来別々に分析すべきところではあるが、掲載誌が社会心理学とされるものもあり分類が難しいこと、文献総数が少ないことから社会学・心理学分野としてまとめて分析した。

3. 概念分析の手順

各文献を精読し、実親に対する子の「介護意識」の属性 (Attributes) として、概念 (介護意識) の発生中に何が起こるか、概念の特徴は何か、議論している“もの”は何か、本質や奥底にあるものは何か¹⁹⁾、著者はその概念 (介護意識) をどのように定義しているのか、この特性はその概念に属するか²²⁾ という問いに答える記述を抽出した。先行要因 (Antecedents) として、その概念 (介護意識) 発生の前に何が起こるか、その概念はどんな時に高く、どんな時に低くなるか¹⁹⁾ という問いに答える記述を、帰結 (Consequences) として、その概念 (介護意識) 発生の後に何が起こるか、概念の結果として何が起こるか¹⁹⁾ という問いに答える記述をそれぞれ抽出した。同時に、実親に対する子の「介護意識」を別の言葉で表現する代理用語 (surrogate terms)¹⁹⁾ を抽出した。

属性、先行要因、帰結として得られたデータを、分野ごとに別々のコーディングシートに記載した後、各データをコード化し類似の意味を持つものを集約してサブカテゴリー化、さらにカテゴリー化した。その際、各コードが得られた文献の発表年についても記載し、時間の推移とともにコードの出現に変化があるかどうかについても概観した。文献の発表年は、2000年まで (介護保険制度導入前)、その後10年毎に2001年から2010年まで、2011年から2020年12月末までの3期に区分した。3分野の結果を比較したのち、属性、先行要因、帰結を統合し、概念モデルを作成した (図2)。「介護意識」の属性から、現在の、実親の介護に対する子の認知・意味づけの観点からの「介護意識」という概念を定義し、最後に「介護意識」が現れていると考えられる典型的な事例を探索し特定した。

なお、データを分析するにあたり、2名の研究者からスーパーバイズを受け、分析結果の真実性の確保に努めた。

III. 結果

「介護意識」概念を最初に用いたのは藤崎¹⁷⁾であり、藤崎は、それまでに発表された論文から、要介護老人の在宅

介護を規定する家族的要因について、介護態勢 (介護の客観的側面) と介護意識 (介護の主観的側面) の2側面に分け、その分析枠組みを検討していた。すなわち、「介護意識」という概念が研究に用いられるようになったのは最近30年のことであり、「介護意識」は比較的新しい概念であると言える。

分析対象とした52件の文献の中で、「介護」について明確に定義しているものはなく、「世話をする」5件^{12) 23) ~26)}、「面倒をみる (見る)」5件^{27) ~31)}、「看る」3件^{32) ~34)}、「みる」2件^{9) 15)}、「見る」1件³⁵⁾と表現され、介護行為の一つとして「排泄ケア」をとりあげたものが1件³⁶⁾であった。袖井が1991年に、介護という言葉が一般的に使われるようになったのはここ10年である²⁷⁾と指摘しており、「介護意識」のみならず、「介護」という言葉も一般に使われ始めて40年程度の比較的新しい概念であると言える。

著者が、「介護意識」の定義としてその内容を記載した論文は17件あったが、定義とされた言葉があいまいなもの、トートロジーに陥っているもの、範囲の広いものも多く、実親に対する子の「介護意識」を明確に定義しているものはほとんど見当たらなかった。Rodgers¹⁹⁾の分析手順に従って論文を最低3回繰り返し読み、筆者が実親に対する子の「介護意識」と捉えて表現している内容について分析したところ以下の結果が得られた。

3分野を統合した属性、先行要因、帰結の結果をそれぞれ表1、表2、表3に示し、属性、先行要件、帰結の概念モデルを図2に示す。以下、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを[]、コードを〈〉で示す。

1. 属性

実親の介護に対する子の認知・意味づけの観点からの「介護意識」の属性には、5つのカテゴリー【情愛】【義務・責任】【報恩】【世間体】【自身の介護への期待】が抽出された (表1)。そのうち4カテゴリー【情愛】【義務・責任】【報恩】【世間体】は看護学分野、介護・社会福祉学分野、社会学・心理学分野のいずれの分野でも発表年代を問わず抽出された。ただし、【自身の介護への期待】のみ、2001年以降発表の文献には認められなかった。

1) 情愛

【情愛】は、[愛情・情愛・尊敬] [親の幸せを願う思い] [あわれみの情] [絆] [介護したい・世話をしたい]の5つのサブカテゴリーから成り、実親に対する介護者 (子) 自身がもつ持続的で深い愛情をあらわしていた。これらのサブカテゴリーを、なさけ・いつくしみ・愛情の意味を持つ【情愛】³⁷⁾としてまとめた。

[愛情・情愛・尊敬]は、〈愛情〉〈情愛〉〈思いやり〉〈大切な家族のため〉〈親の人柄への尊敬の念〉などのコードから成っていた^{17) 27) 32) ~34) 36) 38) ~41)}。

表 1. 実親に対する子の「介護意識」の属性：Attributes（3分野統合）

カテゴリー	サブカテゴリー	分野	コード(コード数)	文献の発表年の分布		
				～2000年	2001～2010年	2011～2020年
情愛	愛情・情愛・尊敬	看護学	愛情、情愛、思いやり、家族での介護が安心、親を他人に任せられない(5)	中沢ら(1993)、斎藤ら(1998)、寺島ら(1999)	市森ら(2004)、平松(2005)	米沢ら(2011)、山口ら(2019)
		介護・社会福祉学	愛情、大切な家族のため(2)	袖井(1991)、黒岡(1997)		
		社会学・心理学	親の人柄への愛着、親の人柄への尊敬の念(2)	藤崎(1990)		
	親の幸せを願う思い	看護学	家を離れるのは親が寂しいだろう、気ままに過ごさせてあげたい、家族と一緒に過ごさせてあげたい、家族といることが親の幸せ、家族での介護は親にとって幸せ(5)	寺島ら(1999)		米沢ら(2011)、村上ら(2016)
		介護・社会福祉学	住み慣れた家で家族に囲まれて過ごさせてあげたい、親が住み慣れた場所で介護をしたい(2)	黒岡(1997)	石川(2001)	
		社会学・心理学	家族で介護するのが親の幸せ(1)		唐沢(2006)	
	あわれみの情	看護学	身体の不自由さへの哀れみ、かわいそう・同情、施設への入所はかわいそう(3)	中沢ら(1993)	市森ら(2004)、水主(2004)	
		看護学	絆をもつ、家族の絆が深まる、高齢者との絆が深まる(3)	萩野ら(1998)	桂ら(2001)	村上ら(2016)
		介護・社会福祉学	心情的絆(1)			高橋ら(2015)
	絆	社会学・心理学	情動的な絆、家族としての絆意識(2)	斉藤ら(2000)	高木ら(2004)	
		看護学	何かしてあげたい、自分で介護したい、家族だけで介護したい、家族で世話をしたい、世話をしたい(5)	助川ら(1996)、寺島ら(1999)、谷垣ら(2000)		實金ら(2011)、山口ら(2019)
		介護・社会福祉学	介護したい、家族の力だけで世話したい、最後まで見てあげたい、親が困っているときは助けたい、介護の希望(5)		杉澤ら(2002)、青柳(2009)、青柳(2010)	中田ら(2016)、藤江(2019)
介護したい・世話をしたい	社会学・心理学	介護していきたい、自分たちの手で世話をしたい、よりよく世話できるのは家族(3)	松岡(1993)	唐沢(2001)、平野ら(2006)、唐沢(2009)		
	看護学	自分が看るのとは当たり前、子どもが親の介護をするのは当然、親だから在宅介護は当然、家族が介護するのは当然、家族での介護が一番、自宅で介護が望ましい、家族で面倒見れば介護できる(7)	中沢ら(1993)、寺島ら(1999)	鈴木ら(2001)、平松ら(2003)、渡部ら(2005)、平松(2005)	上野(2012)、村上ら(2016)	
	介護・社会福祉学	どんなことをしても家族で面倒をみる、介護は家族が担うもの、家族介護は当然・当たり前、家族での介護がよい、家族が介護することは理想(5)	袖井(1991)、齊藤(1999)	セゾン総合研究所(2003)、安梅ら(2006)、青柳(2008)、青柳(2010)	中(2016)	
義務・責任	当然・規範意識	社会学・心理学	介護は続柄として当然、家族介護は当然、家族介護が望ましい、家族での介護が望ましく当然、介護は第一義的に家族が担当するもの、親の面倒は子かみる(6)		高橋(2003)、高木ら(2004)、唐沢(2001)、唐沢(2006)	渡辺ら(2011)、安(2012)
		看護学	介護は生活の一部、介護に対する役割意識、介護は自分の役割、介護役割を担うのは当たり前、介護するのは自分(5)	中沢ら(1993)、寺島ら(1999)	桂ら(2001)、平松ら(2003)、市森ら(2004)	山口ら(2019)
		介護・社会福祉学	自ら介護する、自分の役割だと思ふ(2)		石川(2001)、青柳(2010)	
	役割意識	看護学	家族や親族がするべき、家族がみるべき、家族がするべき、家族が中心となって行うべき、自分が看るしかない、自分がするしかない、子の義務(7)	石井(1996)、寺島ら(1999)、谷垣ら(2000)		米沢ら(2011)、上野(2012)、村上ら(2016)
		介護・社会福祉学	老親の面倒をみることは子の義務、家族の義務、みなければならぬという扶養義務、介護は子・家族がするべき、家族主体で介護を担うべき、子・家族が面倒をみるべき、親の老後は子が面倒をみるべき、献身的な犠牲(6)	袖井(1991)、渡辺他(1994)、黒岡(1997)、寺島ら(1997)、齊藤(1999)	木田ら(2007)、青柳(2010)	高橋ら(2015)、藤江(2019)
		社会学・心理学	在宅介護への義務意識、介護は家族の義務、老人は家庭で介護すべき、家族の手で介護すべき、家族で介護すべき、親の面倒は子かみるべき(6)	松岡(1993)	高橋(2002)、高木ら(2004)、唐沢(2006)、唐沢(2008)、唐沢(2009)	渡辺ら(2011)
	義務	看護学	家族の責任として割り切る思い、介護受容、親をみる責任、介護しなければならぬという責任、責任意識(5)	倉形ら(1997)、寺島ら(2000)	市森ら(2004)、水主(2004)、平松(2005)	實金ら(2011)
		介護・社会福祉学	親への責任(1)	袖井(1991)		
		社会学・心理学	親の介護に対する責任感、介護責任を負う、親の幸福に対する責任感(3)	斉藤ら(2000)	高木ら(2004)、唐沢(2009)	
	責任	看護学	恩返し、報恩、育ててくれた恩返し、養育に対する恩返し、恩義を感じる、過去の世話に対する感謝(6)	寺島ら(1999)	平松ら(2003)、平松(2005)	米沢ら(2011)、實金ら(2011)、上野(2012)、村上ら(2016)
		介護・社会福祉学	育ててくれたことへの恩返し、恩返し(2)	袖井(1991)、黒岡(1997)	石川(2001)、青柳(2010)	
		社会学・心理学	育ててくれた親の苦分や愛情に報いる、子育てを手伝ってもらった感謝・恩返し、支援への恩返し(3)	藤崎(1990)		中西(2011)
報恩	看護学	育ててくれたことへの親孝行、親孝行(2)		市森ら(2004)、水主(2004)	實金ら(2011)	
	介護・社会福祉学	親孝行(1)		青柳(2010)		
	社会学・心理学	親孝行(1)	藤崎(1990)			
世間体	世間体	看護学	世間体、介護しないのは世間体が悪い(2)	鈴木ら(2001)、平松ら(2003)、平松(2005)		上野(2012)
		介護・社会福祉学	世間体、介護しないのは世間体が悪い(2)	袖井(1991)	セゾン総合研究所(2003)、安梅ら(2006)	
		社会学・心理学	世間体(1)	藤崎(1990)		
	自身・他者に対する恥意識	看護学	恥意識(他者の目に対して)、介護しないのは恥(自分に対して)(2)		平松ら(2003)、平松(2005)	
第三者の介入への抵抗感	社会学・心理学	他人の世話になりにくい(1)		唐沢(2001)		
	社会学・心理学	他人の世話になりにくい(1)		唐沢(2001)		
自身の介護への期待	自分も子に将来の介護を期待	看護学	自分も子に将来の介護を期待(1)	寺島(1999)		
		社会学・心理学	将来自分が子から受けるかもわからないケアを今のうちに親に対してしておく(1)	藤崎(1990)		

「親の幸せを願う思い」は、〈家を離れるのは親が寂しいだろう〉〈家族といることが親の幸せ〉〈家族での介護は親にとって幸せ〉〈住み慣れた家で家族に囲まれて過ごさせてあげたい〉などのコードから成り^{33) 34) 40) 42) ~44)}、親自身の幸福を第一に考える子の思いがあらわれていた。「あわれみの情」は看護学分野のみにみられ、〈身体不自由さへの哀れみ〉〈かわいそう・同情〉〈施設への入所はかわいそう〉の3コードから成っており^{9) 32) 36)}、弱い立場となる親を擁護する感情があらわれていた。「絆」は、〈絆をもつ〉〈家族の絆が深まる〉〈心情的絆〉などから成り^{8) 30) 38) 44) ~46)}、離れがたい親子の情があらわれていた。最後に、「介護したい・世話をしたい」は、〈自分で介護したい〉〈家族だけで介護したい〉〈親が困っているときは助けたい〉〈最後まで見てあげたい〉〈よりよく世話できるのは家族

などのコードから成り^{10) 12) 23) ~26) 31) 34) 35) 41) 47) ~50)}、自分自身の手で介護を行いたいという心情があらわれていた。

2) 義務・責任

「義務・責任」は、「当然・規範意識」[役割意識][義務][責任]の4つのサブカテゴリーから構成された。

「当然・規範意識」は21件の文献から得られ、〈子どもが親の介護をするのは当然〉〈親だから在宅介護は当然〉〈家族での介護が一番〉〈どんなことをしても家族で面倒をみる〉〈介護は第一義的に家族が担当するもの〉〈介護は続柄として当然〉などのコードから成り^{11) 13) ~15) 24) 27) 29) 32) 34) 35) 39) 43) 44) 46) 51) ~57)}、親の介護を引き受けることを当たり前のこととしてとらえている心情があらわされていた。さらに、〈介護は生活の一部〉〈介護は自分の役割〉〈自ら介

護する) など^{8) 32) 34) ~36) 41) 42) 53)}、親の介護を自分の役割として捉える「役割意識」が見られた。「義務」についての記載のある文献は22件と最も多く、〈家族がすべき〉〈自分が看るしかない〉〈子の義務〉〈家族の義務〉〈親の老後は子が面倒をみるべき〉〈在宅介護への義務意識〉などのコードから成っていた^{12) 13) 15) 23) 27) 28) 30) 31) 33) ~35) 40) 43) 44) 46) 48) 51) 58) ~62)}。「責任」は〈介護しなければならない〉〈家族の責任として割り切る思い〉〈責任意識〉〈親の幸福に対する責任感〉などのコードから成っていた^{9) 12) 26) 27) 36) 39) 45) 46) 63) 64)}。

【義務・責任】は、最も多くのコード数を得た属性である。義務という言葉を含むコードは多く、サブカテゴリーを「義務」としてまとめた。義務という言葉には、人としてしなければならない務め、法律が強制する行為⁶⁵⁾ という意味がある。責任という言葉を含むコードも多く、サブカテゴリー「責任」としてまとめた。責任という言葉には、しなければならない任務という意味に加えて、責めを引き受けるという意味がある⁶⁶⁾。サブカテゴリーの「介護は当然・規範意識」では、コードとして〈当然(当たり前)〉という言葉が多くみられるが、これは、普通であること、と同時に道義上そうあるべきこと⁶⁷⁾ という意味を持ち、義務の感覚を含んでいる。「役割意識」も、立場上担うべきことという義務のニュアンスがある。以上のことからこれらのサブカテゴリーを【義務・責任】としてまとめた。

3) 報恩

【報恩】は、「恩返し」[親孝行]の2つのサブカテゴリーから構成された。

「恩返し」は、〈恩返し〉〈育ててくれた恩返し〉〈恩・義理を感じる〉〈過去の世話に対する感謝〉〈子育てを手伝ってもらった感謝・恩返し〉などのコードから成っていた^{15) 17) 26) 27) 33) ~35) 39) 40) 42) 44) 53) 68)}。「親孝行」は、〈育ててくれたことへの親孝行〉〈親孝行〉の2コードから成っていた^{9) 17) 26) 35) 36)}。

東アジアには、古くから儒教思想があり、その徳目の中で最も重要な「孝」が、儒教思想を持つ国では共通して親子関係や介護の思想を規定していると言われている^{69) ~71)}。しかし、同じように儒教思想をもつ韓国や中国での「孝」のとらえ方は、日本の「孝」のとらえ方とは異なることも同時に指摘されている^{69) ~71)}。それが【報恩】の思想である。日本の「親孝行」は恩によって条件づけられているが、中国の儒教においても^{69) 71)}、韓国の儒教においても^{69) 70)}、論語その他の儒教の古典においても⁷¹⁾、「親孝行」(親子関係や介護の思想)と「恩返し」(【報恩】)の思想は連関していないと明らかにされている。日本人特有の「親孝行」の理由となる恩は「親の子供を生んでくれた恩、養育してくれた恩」⁷⁰⁾と言われており、本研究で日本人の実親に対する子の「介護意識」の属性として【報恩】が抽出されたこ

とはこれに一致している。

すなわち、日本人の実親の介護に対する感覚には、〈育ててもらった〉〈支援してもらった〉など、実親から何かをしてもらったことへの感謝、恩を感じることに動機づけられた「親孝行」があり、それは他の国にはない感覚、概念の属性であるということである。他の儒教思想の国における孝行は、親が子を産んだというその事実によって正当化され⁶⁹⁾、仮に親が不慈(例えば、愛情を示さない、冷たくあたる、継親が子をいじめる状況)であっても子は親(継親を含む)への「孝」の義務を負うことが繰り返し説かれている⁷¹⁾。

4) 世間体

【世間体】は、「世間体」[自身・他者に対する恥意識][第三者の介入への抵抗感]の3つのサブカテゴリーから構成された。

「世間体」は、〈世間体〉〈介護しないのは世間体が悪い〉の2コードから成っていた^{14) 15) 17) 27) 39) 52) 53) 55)}。「自身・他者に対する恥意識」は、〈恥意識(他者の目に対して)〉〈介護しないのは恥(自分に対して)〉の2コードから成り^{39) 53)}、他者の目を感じての恥意識と自分自身への恥意識の2つの方向性がみられた。「第三者の介入への抵抗感」は、〈他人の世話になりたくない〉の1コードであった²⁴⁾。

この属性は、世間の人々に対する体裁や対面を重視する態度をあらわしている。〈介護しないのは世間体が悪い〉というコードについては、介護しない人とは子自身のことであるので、第一に子が自分自身の世間体を懸念していることが考えられる。しかし、対象文献の中には誰のどのような世間体なのかその記述があいまいなものが多く、子が自分の【世間体】とともに、親の【世間体】を慮っている可能性もあると考えられた。実親に対する子の「介護意識」の属性としての【世間体】についてはさらなる検討が必要と考える。

5) 自身の介護への期待

【自身の介護への期待】は「自分も子に将来の介護を期待」の1サブカテゴリー、〈自分も子に将来の介護を期待〉〈将来自分が子から受けるかもしれないケアを今のうちに親に対してしておく〉の2コードから成っていた^{17) 34)}。ただし、【自身の介護への期待】は、実親に対する子の「介護意識」の属性としては2001年以降に発表された論文からは抽出されなかった。

内閣府による全国の55歳以上の男女対象の調査(2017年)⁷²⁾によると、介護が必要になった場合に介護を依頼したい人は、配偶者36.7%、ヘルパーなど介護サービスの人31.5%、子22.7%、子の配偶者1.7%となっている。また、親の介護は自分が行いたい、自分の介護は専門家に依頼したい^{16) 49)}、自身が親に対しておこなってきた介護を子世代

表2. 実親に対する子の「介護意識」の先行要因：Antecedents（3分野統合）

カテゴリー	サブカテゴリー	分野	コード(コード数)	文献の発表年の分布			
				～2000年	2001年～2010年	2011年以降	
子の個人的背景	血縁関係にある	看護学	血縁関係にあること(1)	寺島ら(2000)			
		社会学・心理学	血縁関係にあること、血縁では介護意識が強くなり義理では弱くなる(2)	松岡(1993)、斉藤ら(2000)			
	きょうだい順: 長男・長女	介護・社会福祉学	長男・長女が強い(1)			富江(2019)	
		社会学・心理学	長男が強い(1)	斉藤ら(2000)			
	性別	男性(息子)	看護学	男性が女性より「介護は家族で行うことだ」(1)		桂ら(2001)	
			社会学・心理学	息子が強い「統括として当然」は息子が最も強くついて、娘、家族介護意識は女性より男性が強い、親の介護は当然とするのは男性に顕著(4)	斉藤ら(2000)	高木ら(2004)、唐沢(2006)	安(2012)
	女性(娘)	介護・社会福祉学	女性が在宅介護を志向、男子より女子の方が介護への意識が高い(高校生)(2)		青柳(2008)	中田ら(2016)	
		看護学	60歳以上の娘(嫁)ほど家族だけで介護しようとする(1)	助川ら(1996)			
	年齢	年齢の高い人(50歳以上)	看護学	50歳以上は49歳以下より介護機能を強く認識、看護学生より学生の親の方が「子どもとして当たり前の義務」、60歳以上の娘(嫁)ほど家族だけで介護しようとする(3)	助川ら(1996)、寺島ら(1999)		米沢ら(2011)
			介護・社会福祉学	年齢が高いほど介護意識が強くなる(1)	齊藤(1999)		
		社会学・心理学	年齢が高いほど家族介護意識が強い(1)		唐沢(2006)		
	10～20代の若年者	介護・社会福祉学	20代が自分が介護して恩返ししたい、女子高校生は介護に対する意識が高い(2)	黒岡(1997)	青柳(2008)		
	社会学・心理学	年齢が低い方が介護意向が高い(切実感が低いため)(1)			中西(2011)		
	後天的な要因	職業(医療系の職業人)・看護師・介護職員・女性検査技師	看護学	看護学生は「家族と同居して介護したい」、看護学生は介護の役割意識を認識、看護学生「知識があるから」、看護学生は一般学生より「介護は自宅が家族中心で」と考える、看護職に就いているから(5)	萩野ら(1998)、寺島ら(1999)	水主(2004)	村上ら(2016)
			介護・社会福祉学	看護師・検査技師(女性)は自分で在宅介護する、日ごろから介護している介護職員(2)	黒岡(1997)	石川(2001)	
社会学・心理学		職業(看護学生)(1)		高橋(2003)			
最終学歴: 高学歴ほど介護意識は低下 配偶者がいない		看護学	最終学歴が高い人は福祉サービスの活用意識が高い(1)	斉藤ら(1997)			
介護・社会福祉学	高学歴ほど介護意識が低下(1)	袖井(1991)					
介護・社会福祉学	息子・娘ともに配偶者がいない方が強い(1)	渡辺ら(1994)					
家族の歴史・家族関係	子ども頃から大事にされた・育ててもらった・支援してもらったという思い	看護学	大事にしてくれた、子どものころから大事にされた感覚、育ててくれた、養育してもらった、世話になった、苦労していた母の記憶(6)	中沢ら(1993)、寺島ら(1999)	市森ら(2004)	米沢ら(2011)、實倉ら(2011) 上野(2012)、山口ら(2019)	
		介護・社会福祉学	育ててもらったという思い(1)	袖井(1991)	石川(2001)	富江(2019)	
	社会学・心理学	育ててくれた親の愛情、親からの支援、子育てを手伝ってもらった記憶、育ててくれた親の苦労(4)	藤崎(1990)		中西(2011)		
	親への尊敬・信頼	看護学	親への尊敬・信頼が強い(1)	寺島ら(2000)			
		看護学	高齢者との交流経験・密接な付き合い、ともに生活してきた家族としての愛情、密接な家族関係、親密感が強い、親への好感・親和度が高い、親への思いが強い、良好な家族関係、良好な関係性、家族関係に満足(9)	中沢ら(1993)、萩野ら(1998)、寺島ら(2000)、谷垣ら(2000)		村上ら(2016)、山口ら(2019)	
	親・高齢者との同居経験	介護・社会福祉学	一家がともに過ごす時間が多い、親との結びつきを重視、祖父母との親密な関係(3)	袖井(1991)	石川(2001)、木田ら(2007)		
		社会学・心理学	親密な情緒的つながり、親密な家族関係、家族という人間関係内での拘束(3)		唐沢(2008)、唐沢(2009)		
	親・高齢者との同居経験	看護学	高齢者との同居経験、祖父母との同居経験(2)	倉部ら(1997)、萩野ら(1998)			
		介護・社会福祉学	親世代・子世代の同居、祖父母との同居経験(2)	渡辺ら(1994)		高橋ら(2015)、中(2016)	
	社会学・心理学	親と同居している(1)	斉藤ら(2000)	高木ら(2004)			
	親が介護する姿を見た・身近に要介護者の存在	看護学	親が祖父母を介護する姿を見た経験、介護経験がある(2)	寺島ら(1999)		村上ら(2016)	
		介護・社会福祉学	身近に要介護者の存在(1)		青柳(2010)		
	社会学・心理学	介護を必要とする祖父母がいる(1)		平岡ら(2006)			
	親・家族からの介護の期待	看護学	親からみてほしいと頼まれている、看護学生は家族から介護を期待される(2)	萩野ら(1998)、寺島ら(1999)			
		介護・社会福祉学	親が家族以外の世話を頼る、親が家族での介護を希望、親の持つ介護意識(3)		杉澤ら(2002)	高橋ら(2015)、富江(2019)	
社会学・心理学	親が家族による介護を希望(1)		唐沢(2001)	渡辺ら(2011)			
生活環境からの影響	家制度・イ意識	看護学	家族制度、家制度(2)	石井(1996)、齊藤他(1997)			
		介護・社会福祉学	家制度、イ意識が高い、イ意識がある、核家族が基本との考えは介護意識を減弱化する(4)	袖井(1991)		中田ら(2016)、富江(2019)	
	社会学・心理学	家業を引き継ぐとき、家制度を中心とした社会システム(2)	斉藤ら(2000)	唐沢(2001)			
	人間関係が密な地域、伝統・社会規範を重んじる地域の生活経験	看護学	公的扶助を頼る規範の中で生活してきた、家族での高齢者介護が当然であるとする中での生活経験(2)	石井(1996)			
		介護・社会福祉学	都心部から離れた人間のつながりのある地方在住、伝統的・社会規範の残る地域、居住地域の特色(3)	渡辺ら(1994)、齊藤(1999)		高橋ら(2015)	
	社会学・心理学	圧力として感じられる社会規範が残る地域、伝統・社会規範を重んじる地域、匿名性のない閉鎖的な社会(3)	藤崎(1990)	高橋(2002)			
介護者本人が内面化した社会規範	看護学	本人の潜在的な伝統的価値観、性別役割意識(2)	斉藤ら(1997)	平松(2005)			
	介護・社会福祉学	家族内での役割意識(1)			中田ら(2016)		
社会学・心理学	介護者本人が強く内面化した社会規範(1)	藤崎(1990)	高木ら(2004)				

がそのまま再現しようとは考えておらず、子に対し介護期待がある場合も介護保険制度などのサービス利用を念頭に、介護の内容や期間をみずから制限する控えめな期待にとどめようとしている⁷³⁾との報告もある。介護保険制度の創設とともに、介護者世代の人(子)が自身の介護を自分の子に期待することが少なくなっているといえる。介護保険制度創設を含めた社会制度・生活環境の変化により、「介護意識」概念の属性に変化がみられてきていることが推察される。

2. 先行要因

「介護意識」の先行要因には、【子の個人的背景(生得

的な要因・後天的な要因)】【家族の歴史・家族関係】【生活環境からの影響】の3つのカテゴリーが抽出された(表2)。これらの3カテゴリーは、看護学分野、介護・社会福祉学分野、社会学・心理学分野のいずれの分野でも発表年代を問わず抽出された。

1) 子の個人的背景(生得的な要因)

【子の個人的背景(生得的な要因)】は、「血縁関係にある」[きょうだい順][性別][年齢]の4つのサブカテゴリーから構成された。

[血縁関係にある]は、「血縁関係にあること」(血縁では介護意識が強くなり義理では弱くなる)の2コードか

ら成っていた^{45) 48) 64)}。[きょうだい順]は、〈長男・長女が強い〉〈長男が強い〉の2コードであり^{31) 45)}、長子の「介護意識」が強いことが示されていた。[性別]については〈男性(息子)〉が強い^{8) 43) 45) 46) 57)}とするものが多いが、〈女性(娘)〉が強いとするものもあった^{10) 47) 56)}。親の介護について家族での介護を希望するのは男性に多いが、男性は女性に介護役割を期待する^{8) 51)}との報告や、女性は男性より“父母の介護を行いたい”と思っている^{35) 56)}、女性は自分が介護することを覚悟している⁵¹⁾などの報告があり、自分自身が担う介護の範囲のとらえ方によって、[性別]による差に違いが生じると考えられる。

[年齢]については、〈10～20代の若年者〉^{33) 56) 68)}と〈年齢の高い人(50歳以上)〉^{34) 40) 43) 47) 51)}の2層で実親に対する子の「介護意識」が強いことが示されていた。10～20代の若年層に「介護意識」が強いのは、祖父母・父母ともに健康な世代であり、介護の実感が低いためと考察されていた^{56) 68)}。

2) 子の個人的背景(後天的な要因)

【子の個人的背景(後天的な要因)】は、[職業][最終学歴][配偶者がいない]の3つのサブカテゴリーから構成された。

実親に対する子の「介護意識」は、[職業]としては〈医療系の職業人〉に強く、看護職(看護学生を含む)、介護職員、検査技師(女性)が抽出された^{9) 29) 33) 34) 38) 42) 44)}。[最終学歴]は〈最終学歴が高い人は福祉サービスの活用意識が高い〉⁷⁴⁾〈高学歴ほど介護意識が低下〉²⁷⁾の2コードがあり、高学歴ほど実親に対する子の「介護意識」が低下することが示された。[配偶者がいない]については、介護・社会福祉領域から〈息子・娘ともに配偶者がいない方が強い〉のコードが得られた³⁹⁾。

3) 家族の歴史・家族関係

【家族の歴史・家族関係】は、[子どもの頃から大事にされた・育ててもらった・支援してもらったという思い][親への尊敬・信頼][親密・良好な家族関係][親・高齢者との同居経験][親が介護する姿を見た・身近に要介護者の存在][親・家族からの介護の期待]の6つのサブカテゴリーから構成された。

[子どもの頃から大事にされた・育ててもらった・支援してもらったという思い]は、〈子どものころから大事にされた感覚〉〈世話になった〉〈育ててもらったという思い〉〈子育てを手伝ってもらった記憶〉〈育ててくれた親の苦労〉などのカテゴリーから成っていた^{15) 17) 26) 27) 31) 32) 34) 36) 40) ~42) 68)}。[親への尊敬・信頼]は、看護学分野からの〈親への尊敬・信頼が強い〉の1コードから成っていた⁶⁴⁾。[親密・良好な家族関係]は、〈高齢者との交流経験・密接な付き合い〉〈密接な家族関係〉〈親への好感・親和度が高

い〉〈良好な家族関係〉などのコードから成っていた^{12) 23) 27) 32) 38) 41) 42) 44) 61) 62) 64)}。[親・高齢者との同居経験]は、〈高齢者との同居経験〉〈祖父母との同居経験〉〈親と同居している〉などのコードから成っていた^{11) 30) 38) 45) 46) 59) 63)}。[親が介護する姿を見た・身近に要介護者の存在]は、〈親が祖父母を介護する姿を見た経験〉〈介護経験がある〉〈身近に要介護者の存在〉〈介護を必要とする祖父母がいる〉の4コードから成っていた^{34) 35) 44) 50)}。[親・家族からの介護の期待]は、〈親からみてほしいと頼まれている〉〈看護学生は家族から介護を期待される〉〈親が家族以外の世話を嫌がる〉〈親が家族での介護を希望〉などのコードから成っていた^{13) 24) 25) 30) 31) 34) 38)}。

4) 生活環境からの影響

【生活環境からの影響】は、[家制度・イエ意識][人間関係が密な地域、伝統・社会規範を重んじる地域での生活経験][介護者本人が内面化した社会規範]の3つのサブカテゴリーから構成された。

[家制度・イエ意識]は〈家族制度〉〈家制度〉〈イエ意識が高い〉〈家業を引き継ぐとき〉などのコードから成っていた^{10) 24) 27) 31) 45) 58) 74)}。[人間関係が密な地域、伝統・社会規範を重んじる地域での生活経験]は、〈家族での高齢者介護が当然であるとする中での生活経験〉〈都心部から離れた人間のつながりのある地方在住〉〈伝統的・社会規範の残る地域〉〈圧力として感じられる社会規範が残る地域〉〈匿名性のない閉鎖的な社会〉などのコードから成っていた^{17) 28) 30) 51) 58) 59)}。[介護者本人が内面化した社会規範]は、〈本人の潜在的な伝統的価値観〉〈性役割分業意識〉〈介護者本人が強く内面化した社会規範〉などのコードから成っていた^{10) 17) 39) 46) 74)}。

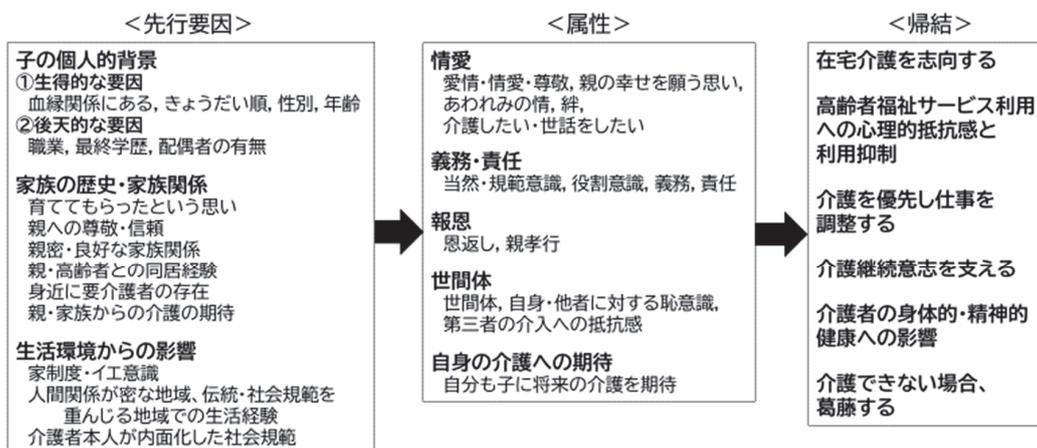
3. 帰結

実親に対する子の「介護意識」の帰結として、【在宅介護を志向する】【高齢者福祉サービス利用への心理的抵抗感と利用抑制】【介護を優先し仕事を調整する】【介護継続意志を支える】【介護者の身体的・精神的健康への影響】【介護できない場合、葛藤する】の6つのカテゴリーが抽出された(表3)。これらの6カテゴリーのうち、【在宅介護を志向する】【高齢者福祉サービス利用への心理的抵抗感と利用抑制】【介護を優先し仕事を調整する】【介護者の身体的・精神的健康への影響】は、看護学分野、介護・社会福祉学分野、社会学・心理学分野のいずれの分野でも発表年代を問わず抽出された。【介護できない場合、葛藤する】は、看護学分野、介護・社会福祉学分野から抽出され、【介護継続意志を支える】は、社会学・心理学分野の文献から抽出された。

1) 在宅介護を志向する

表3. 実親に対する子の「介護意識」の帰結：Consequences（3分野統合）

カテゴリ	サブカテゴリ	分野	コード(コード数)	文献の発表年の分布		
				～2000年	2001年～2010年	2011年以降
在宅介護を志向する	介護への関心の高まりと準備行動	看護学	介護問題への関心を高める在宅福祉サービスの活用意識に影響を与える、介護問題を自分のこととして受け止める、介護教育機会への参加意識(3)	斉藤他(1997), 倉形ら(1997)		
		介護・社会福祉学	老人介護を自分自身の問題としてとらえる、将来の介護への準備をする(高齢者・認知症の学習、認知症予防教室参加、ボランティア活動参加)(2)	内藤ら(1997)		
		社会学・心理学	専門書を買って勉強する、介護行動に知識に裏付けられた配慮をする、老人中心に考える姿勢(3)	藤崎(1990)		
	在宅介護を希望する	看護学	自宅で介護したいと考える(60歳以上の女性、大学生、女性)、父母に介護が必要になったら介護したい、男性は介護は家族で行うことだと思つと同時に介護を女性の役割だと考える、親の面倒は基本的に家族である、近隣住人の援助への抵抗感、懐かしい気持ちで介護しようとする、ケアの方法を工夫する(7)	中沢ら(1993), 石井(1996), 駒井ら(1996), 谷村ら(2000)	桂ら(2001), 水主(2004)	米沢ら(2011), 村上ら(2016), 山口ら(2019)
		介護・社会福祉学	家族での介護を考える、在宅介護を志向する(女性)、父母に介護が必要になったら介護したい、男性は介護は家族で行うことだと思つと同時に介護を女性の役割だと考える、親の面倒は基本的に家族である、近隣住人の援助への抵抗感、懐かしい気持ちで介護しようとする、ケアの方法を工夫する(7)	内藤ら(1997), 齊藤(1999)	木田ら(2007), 青柳(2008), 青柳(2010)	中田ら(2016)
		社会学・心理学	介護が必要になったら在宅介護を希望する、介護が必要になったら家族で介護する、老親がひとり生活できなくなったら介護をする、実父母と同居する要は在宅介護希望が特に強くなる、女子学生は男子より「親の介護をする」(5)	齊藤ら(2000)	平岡ら(2006)	渡辺ら(2011)
	主介護者となる	看護学	介護し、その介護している自分に誇りを感じる、自然に排泄ケアを行える(男性)、結婚後も同居して介護したいと考える(看護学生)、介護者は自分と考える(看護学生)(4)	寺島ら(1999)	市森ら(2004), 水主(2004)	山口ら(2019)
		介護・社会福祉学	自分か中心となって介護する、自分一人でも親の面倒をみたいと思う、在宅で自分が介護する(女性)、関係性で親後で介護したいと思う(高校生・男子より女子が強い)、自分が介護を担うことを覚悟する(特に女性)(5)	黒岡(1997), 齊藤(1999)	青柳(2010)	黒江(2019)
		社会学・心理学	介護役割を中心になって担う、主介護者となる、他者の介入ではなく個人的解決を求め、介護経験がある(4)	藤崎(1990), 松岡(1993)	高橋(2003), 森本ら(2004)	
		社会学・心理学	介護し、その介護している自分に誇りを感じる、自然に排泄ケアを行える(男性)、結婚後も同居して介護したいと考える(看護学生)、介護者は自分と考える(看護学生)(4)	寺島ら(1999)	市森ら(2004), 水主(2004)	山口ら(2019)
高齢者福祉サービス利用への心理的抵抗感と利用抑制	高齢者福祉サービスの利用に心理的抵抗感の発生	看護学	公的サービス利用への抵抗感がある、専門職の介入に抵抗がある、介護保険サービス利用を躊躇する/抵抗を感じる、社会資源の利用に抵抗がある(女性より男性)、訪問型サービスを受けることに恥の意識がある(5)	駒井ら(1996), 荻野ら(1998), 寺島ら(1999)	桂ら(2001)	上野(2012)
		介護・社会福祉学	福祉サービス利用への抵抗感が強い、社会資源の利用に対する抵抗感が強い、福祉に対する偏見や誤解が多くなる、介護施設利用への抵抗感(4)	駒井(1991), 内藤ら(1997), 齊藤(1999)		黒江(2019)
		社会学・心理学	ホームヘルプサービス利用に罪悪感を感じる、他者の支援・在宅以外の介護に罪悪感を感じる、介護サービス利用にネガティブ感情「ためらい」をもち、第三者の協力に對して心理的抵抗(恥・目え)を感じる、介護福祉サービス利用時にストレスを感じる(5)			
	高齢者福祉サービスの利用を抑制する	看護学	親の介護を社会に依存しない傾向(1)	荻野ら(1998)		
		介護・社会福祉学	福祉サービスの利用はできるだけ避けたいと考える、福祉サービスの過剰利用が起る、福祉サービス利用希望が低い(1)	齊藤(1999)	杉澤ら(2002)	中(2016)
		社会学・心理学	施設入所は考えたことがない、親の面倒には介護の社会化に否定的、介護サービス利用を抑制する、介護サービス利用をためらう、介護サービス利用を妨げる(5)	藤崎(1990)	唐沢(2001), 高橋(2002), 唐沢(2006)	
介護を優先し仕事を調整する	看護学	要介護となったら就労を維持しない(離職)(1)	荻野ら(1998)			
	介護・社会福祉学	介護休暇を利用する、休職して介護する、離職・休職して介護する、親の希望(住み替え)に従って介護したいを最優先する、地元就職する、他のきょうだい地元元になれば自分が地元に残る(6)	黒岡(1997)	石川(2001)	黒江(2019)	
	社会学・心理学	仕事の量を減らす(非常勤)(1)	藤崎(1990)			
介護継続意志を支える	自らに高い介護責任を負わせる(介護の抱え込み)	看護学	抵抗感を持たずながら排泄ケアを続けた、身体的に疲労を感じても自分が介護を担わなければならないと思う、介護負担を感じても知らず知らずうちに我慢する可能性、拘束感を感じながらも介護を継続、介護する女性は自分の時間を作り出しても社会の目を気にして罪悪感を持つ(5)		市森ら(2004), 平松(2005)	上野(2012), 山口ら(2019)
		介護・社会福祉学	苦勞・限界を感じても在宅でできることをしたいと思う(1)		セゾン総合研究所(2003)	
		社会学・心理学	自らにより高い介護責任を負わせる、親から介護を期待されていると考える、心理的プレッシャーを感じる、家庭内での介護に固執する傾向を高める、介護への拘束、「介護を抱え込む」状態につながる、介護負担が重くても介護継続意志を強く持つ(6)		高橋(2003), 唐沢(2006), 唐沢(2008), 唐沢(2009)	
	うづ感情の高まりと高齢者虐待の危険性	看護学	介護の抱え込みから高齢者虐待の危険性(1)			上野(2012)
		介護・社会福祉学	要介護者に対して「家族の尊厳に従うべき」「我慢すべき」「自己主張すべきでない」と思う、高齢者の自己決定権を侵害する思考、高齢者虐待に結びつく危険性(3)		安梅ら(2006)	
		社会学・心理学	うづ感情が高まる、介護を抱え込みうづ感情が高まる、介護継続意志とうづ感情が同時に高まる(3)		唐沢(2006), 唐沢(2008), 唐沢(2009)	渡辺ら(2011)
介護できない場合、葛藤する	介護できないことへの罪悪感・自責の念	看護学	施設での介護を選択した場合に自責の念が生じる、最初から施設に入ると後悔すると思う、家族がいながら老人を施設に入れることをむごいと感じる(3)	寺島ら(1999)		
		介護・社会福祉学	介護できなかった人は罪悪感をもつ、地元を離れることを親きょうだいに申し訳ないと思う、親戚・周囲から「つたい人間」と見られる(3)	黒岡(1997)		黒江(2019)
	介護・社会福祉学	介護の仕事をしていて自分の親を介護しないのは自己矛盾、親を介護できなかった医療従事者といえるだろうかと思う(2)	黒岡(1997)	石川(2001)		



【在宅介護を志向する】は、[介護への関心の高まりと準備行動] [在宅介護を希望する] [主介護者となる] の3つのサブカテゴリーから構成された。

【介護への関心の高まりと準備行動】は、〈介護問題を自分のこととして受け止める〉〈介護教育機会への参加意識〉〈将来の介護への準備をする〉〈専門書を買って勉強する〉などのコードから成っていた^{17) 60) 63) 74)}。【在宅介護を希望する】は、〈自宅で介護したいと考える〉〈父母に介護が必要になったら介護したい〉〈男性は介護は家族で行うことだと思うと同時に介護を女性の役割だと考える〉〈介護することを覚悟する〉〈介護が必要になったら自宅介護を希望する〉などのコードから成っていた^{8) ~10) 13) 23) 32) 35) 40) 41) 44) 45) 47) 50) 51) 56) 58) 60) 61)}。【主介護者となる】は、〈介護し、その介護している自分に誇りを感じる〉〈結婚後も同居して介護したいと考える〉〈自分一人でも親の面倒をみたいと思う〉〈介護役割を中心になって担う〉などのコードから成っていた^{9) 17) 29) 31) 33) ~36) 41) 46) 48) 51)}。

2) 高齢者福祉サービス利用への心理的抵抗感と利用抑制

【高齢者福祉サービス利用への心理的抵抗感と利用抑制】は、[福祉サービス利用に心理的抵抗感の発生]と[高齢者福祉サービスの利用を抑制する]の2つのサブカテゴリーから構成された。

【福祉サービスの利用に心理的抵抗感の発生】は、〈公的サービス利用への抵抗感がある〉〈専門職の介入に抵抗がある〉〈訪問型サービスを受けることに恥の意識がある〉〈介護施設利用への抵抗感〉〈ホームヘルプサービス利用に罪悪感をもつ〉〈第三者の協力に対して心理的抵抗(恥・甘え)を感じる〉〈介護福祉サービス利用時にストレスを感じる〉などのコードから成っていた^{8) 12) 15) 24) 27) 29) 31) 34) 38) 43) 47) 51) 60)}。【高齢者福祉サービスの利用を抑制する】は、〈親の介護を社会に依存しない傾向〉〈福祉サービスの利用はできるだけ避けたいと考える〉〈福祉サービスの過少利用が起こる〉〈施設入所は考えたことがない〉〈介護サービス利用をためらう〉などのコードから成っていた^{11) 17) 24) 25) 28) 38) 43) 51)}。

3) 介護を優先し仕事を調整する

【介護を優先し仕事を調整する】は、[介護を優先し仕事を調整する]の1サブカテゴリーで構成され、〈要介護となったら就労を維持しない(離職)〉〈介護休暇を利用する〉〈休職して介護する〉〈地元就職する〉〈仕事の量を減らす(非常勤)〉などのコードから成っていた^{17) 31) 33) 38) 42)}。

4) 介護継続意志を支える

【介護継続意志を支える】は、社会学・心理学分野から抽出され、[介護継続意志を支える]の1サブカテゴリーで構成された。〈家族の介護能力を高める〉〈介護継続意志

を支える〉〈介護継続する動機づけの前提条件となる〉など、介護を継続しようとする前向きな意味をもつコードから成っていた^{12) 17) 43) 48)}。

5) 介護者の身体的・精神的健康への影響

【介護者の身体的・精神的健康への影響】は、[自らに高い介護責任を負わせる(介護の抱え込み)] [うつ感情の高まりと高齢者虐待の危険性]の2つのサブカテゴリーで構成されていた。

[自らに高い介護責任を負わせる(介護の抱え込み)]は、〈身体的に疲労を感じても自分が介護を担わなければならないと思う〉〈介護負担を感じても知らず知らずに我慢する可能性〉〈苦勞・限界を感じても在宅でできるだけのことをしたいと思う〉〈自らにより高い介護責任を負わせる〉〈家庭内での介護に固執する傾向を高める〉〈「介護を抱え込む」状態につながる〉などのコードから成っていた^{12) 15) 29) 36) 39) 41) 43) 55) 62)}。[うつ感情の高まりと高齢者虐待の危険性]は、〈介護の抱え込みから高齢者虐待の危険性〉〈高齢者の自己決定権を阻害する思考〉〈うつの感情が高まる〉などのコードから成っていた^{12) ~15) 43) 62)}。

6) 介護できない場合、葛藤する

【介護できない場合、葛藤する】は、[介護できないことへの罪悪感・自責の念] [職業上の自己矛盾(親を介護できなくて医療従事者といえるか)]の2つのサブカテゴリーから構成されていた。

[介護できないことへの罪悪感・自責の念]は、〈施設での介護を選択した場合に自責の念が生じる〉〈家族がいながら老人を施設に入れることをむごいと感じる〉〈介護できなかった人は罪悪感をもつ〉〈親戚・周囲から“冷たい人間”と見られる〉などのコードから成っていた^{31) 33) 34)}。[職業上の自己矛盾(親を介護できなくて医療従事者といえるか)]は、介護・社会福祉学分野から抽出されたものであり、〈介護の仕事をしていて自分の親を介護しないのは自己矛盾〉〈親を介護できなくて医療従事者といえるだろうかと思う〉の2コードから成っていた^{33) 42)}。これは医療従事者に特有のサブカテゴリーであると考えられた。

4. 代用語

実親に対する子の「介護意識」の代用語として、「家族介護意識」が^{9)論文^{11) ~13) 24) 25) 41) 43) 61) 62)}で、「介護認識」が^{1)論文⁸⁾}で用いられていた。}

IV. 考察

1. 本概念の定義

「介護意識」概念を最初に用いたのは藤崎¹⁷⁾であり、本概念は比較的新しい概念であるとわかった。本研究では、

Rodgers¹⁹⁾が提唱する概念分析の方法を用いて、実親の介護に対する子の認知・意味づけの観点からの「介護意識」の概念分析を行った。その結果、概念の属性として5つのカテゴリー【情愛】【義務・責任】【報恩】【世間体】【自身の介護への期待】が抽出された。【自身の介護への期待】のみ、2001年以降の文献からは抽出されなかったが、他の4つの属性は分析対象文献の発表年・研究分野を問わず抽出された。

これらの結果をもとに、本研究では実親に対する子の「介護意識」を、『実親に対する情愛や報恩の念、あるいは、義務・責任を果たそうとする覚悟、自分や親の世間体を守ろうとする意志、自身も将来子に介護してもらいたいとの期待をもって、生活上の支障をきたした実親の、歩行・排泄・食事・入浴等の日常生活に必要な介助や世話をこなそうとする思念』と定義した。

また、先行要因として、【子の個人的背景】【家族の歴史・家族関係】【生活環境からの影響】が見いだされ、実親の介護に対する子の「介護意識」には、幼少期からの親子・家族関係や居住地域の特性、生活の場からの影響があることが示唆された。さらに帰結として、実親に対する子の「介護意識」が【高齢者福祉サービス利用への心理的抵抗感と利用抑制】をもたらし、【在宅介護を志向する】要因となること、また【介護を優先し仕事を調整する】、すなわち介護離職や、正規雇用からパート勤務など非正規雇用を選択することにつながる要因にもなることが示唆された。子が実親の介護をするを選択した場合、「介護意識」が【介護継続意志を支える】という子へのプラスの影響がある一方で、「介護意識」が強い場合は、自分が介護しなければならぬという気持ちから負担が大きくても介護を継続し、疲労が蓄積してうつ状態となったり、高齢者への虐待の危険性をもはらむ状況に陥るなど【介護者の身体的・精神的健康への影響】が生じる可能性も示された。逆に【介護できない場合、葛藤する】とあるように、実親に対する子の「介護意識」の強い人が介護を担うことができない状況にあるときは、[罪悪感や自責の念]といった自分を責める気持ちを持つことも明らかとなり、【介護者の身体的・精神的健康への影響】につながる可能性も示唆された。

2. 本概念のモデルケース

本研究で定義した実親に対する子の「介護意識」の理解を深めるために、本概念を表象する一つのモデルケースとして、藤崎¹⁷⁾が紹介した事例を著者の許可を得て要約して紹介する。この事例の長女Aさんには、実親に対する子の「介護意識」の属性である4カテゴリー【情愛】【義務・責任】【報恩】【世間体】があらわれている。

心理相談員として非常勤で働きながら二人の子を育て

ていた長女Aさんは、子育ての援助を期待して20年ほど前に両親の宅地に別棟を建てて移り住んでいた。被介護者は81歳の母で、父（84歳、変形性脊椎症のため日常動作に多少の不自由がある）と二人暮らし。次男（弟）家族も同敷地内に住んでいた。

母は10年前から認知症の症状があり、6年前に脳委縮性認知症と診断された。若いころは女学校の教員を務め、人一倍元気のよいおばあちゃんだったため、その変貌ぶりに家族も信じられない思いであった。弟夫妻や内科医の兄（長男、妻は他界、隣市で勤務）も休日などには食事介助、離床、おむつ交換などを手伝ってくれている。しかし主介護者は長女Aさんであり、母親に認知症の症状がみられ始めてから仕事の量を徐々に減らして現在は週2回程度としている。母親が認知症になってから5年くらい、認知症があることを公にすることにためらいを感じて福祉サービスを利用せず、家族で問題を抱え込もうとしていた。しかし、訪問看護師が訪れるようになり、高齢者福祉サービスについて説明を受け、今では積極的に利用するようになった。とはいえ、自分自身の家族の生活もあり、自宅と母の家を一日50回も往復するような生活を送っている。Aさんはこの10年間、母親の介護を中心になって担ってきたが、施設入所の可能性については考えたことがないという。こうした強い介護意欲を支えているのは、母親の人柄への愛着・尊敬の念と、かつて自分自身の子育てを手助けしてもらったので、その恩返しをしたいという気持ちである。

Aさんは、自分自身の老後についてはその負担を考え、家族には介護を期待していない。娘には一生仕事を続け、経済的に自立した生き方をしてほしいと望んでいる。こうした娘に対する期待のなかに、職業をとおしての自己実現と介護役割との葛藤に悩んできた、Aさんの人生の足跡が象徴されているように思われる。＜出典＞藤崎宏子：要介護老人の在宅介護を規定する家族的要因－分析枠組の検討－。総合都市研究, 39, 61-83, 1990.¹⁷⁾より一部改変。

3. 本概念の有用性と課題

家族のもつ高齢者介護への思い、介護の認知の仕方は「介護意識」という言葉で表現されるが、その定義は明らかにされていなかった。本研究では、このように重要でありながらも曖昧であった、実親の介護に対する子の認知・意味づけの観点からの「介護意識」という概念の属性を明らかにし、その定義を提言するとともに、「介護意識」概念の先行要件、帰結も明らかにした。実親に対する子の「介護意識」の概念分析の結果は、今後、実親の介護に向き合う子の心情を理解し、子の心身の健康を支えるための、また、家族による介護の選択や介護継続に関する研究の一助となるだけでなく、介護と仕事の両立を可能にするための方策立案の際の手がかりともなり、高齢者と家族を支え続けることに寄与するものと考えられる。

4. 本研究の限界

少子高齢化を背景に、きょうだい数の減少や介護を必要とする高齢者の増加、介護期間の延伸などから、誰でもが自分自身の親や配偶者の親の介護を担う時代となっている。一方で労働者人口が減少し、生涯独身者も増加するといわれているため、時間の流れとともに実親に対する子の「介護意識」は変化し続けると考えられ、今後も繰り返し概念分析する必要があると考える。

V. 結語

本研究では、実親の介護に対する子の認知・意味づけの観点から、日本の家族介護に関する研究における「介護意識」概念の活用状況を分析し、その構成要素を明らかにした。その結果、実親に対する子の「介護意識」の定義を、『実親に対する情愛や報恩の念、あるいは、義務・責任を果たそうとする覚悟、自分や親の世間体を守ろうとする意志、自身も将来子に介護してもらいたいとの期待をもって、生活上の支障をきたした実親の、歩行・排泄・食事・入浴等の日常生活に必要な介助や世話をこなそうとする思念』とまとめた。本研究で抽出された実親に対する子の「介護意識」概念の特性は、今後、実親の介護に向き合う子の心情を理解し、子の心身の健康を支えるための、あるいは介護と仕事の両立を可能にするための方策立案の際の手がかりとなり、高齢者と家族を支え続けることに寄与するものと考ええる。

謝辞

本研究は、日本学術振興会 (JSPS) 科研費 JP20K02161 (研究代表者：真壁五月) の助成を受けた研究の一部であり、第42回日本看護科学学会学術集会で発表したものである。

なお、本研究に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

文献

- 1) 総務省統計局: 人口推計-2021年(令和3年)11月報, 令和3年11月22日公表, [インターネットOn line], [2021年11月], <https://www.stat.go.jp/data/jinsui/pdf/202111.pdf>
- 2) 総務省統計局: 統計データ 日本の統計 第2章 人口・世帯 2-1 人口の推移と将来人口, [インターネット On line], [2021年7月], <https://www.stat.go.jp/data/nihon/zuhyou/n210200100.xlsx>
- 3) 厚生労働省: 介護保険制度について(40歳になられた方へ), [インターネットOn line], [2021年11月], https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000-Roukenkyoku/2gou_leaflet.pdf
- 4) 厚生労働省: 令和元年度 介護保険事業状況報告(年報)のポイント, [インターネットOn line], [2021年11月], https://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/osirase/jigyo/19/dl/r01_point.pdf
- 5) 厚生労働省: 平成13年 国民生活基礎調査の概況, [インターネットOn line], [2021年11月] <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa01/3-3.html>
- 6) 厚生労働省: 国民生活基礎調査の概況 IV介護の状況, [インターネットOn line], [2021年11月] <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa19/dl/05.pdf>
- 7) 総務省統計局: 平成29年就業構造基本調査-結果の概要-, [インターネットOn line], [2021年11月] <chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.stat.go.jp/data/shugyou/2017/pdf/kgaiyou.pdf>
- 8) 桂晶子, 佐竹佑紀: 壮年期の人々の介護意識-男女間の意識の違いに着目して-. 日本看護学会論文集, 老人看護, 32, 44-46, 2001.
- 9) 水主千鶴子: 大学生の介護意識に関する考察-「親が寝たきりになったらどうするか」の意識調査をもとに-. 日本看護福祉学会誌, 10 (1), 82-83, 2004.
- 10) 中田雅美, 中田知生: 都市部に暮らす子どもの別居親に対する介護意識-札幌で実施した調査から-. 北海道社会福祉研究, 36, 1-9, 2016.
- 11) 中友美: 日本・ベトナムの20~30歳代の人々の介護に対する意識. 介護福祉学, 23 (1), 39-46, 2016.
- 12) 唐沢かおり: 高齢者介護における人間関係と家族介護者の精神的健康. 人間環境学研究, 7 (1), 1-7, 2009.
- 13) 渡辺匠, 唐沢かおり, 大高瑞郁: 家族介護と公的介護に対する選好度の規定要因および関係性について. 実験社会心理学研究, 51 (1), 11-20, 2011.
- 14) 安梅勅江, 鈴木英子: 家族の介護意識と要介護者の自己決定阻害の関係に関する研究-高齢者虐待の予防に向けて-. 厚生指標, 53 (8), 25-33, 2006.
- 15) 上野佳代: 要介護者とその家族のデイサービス利用に対する抵抗感の研究. 老年学雑誌, 2, 57-71, 2012.
- 16) 大和礼子: 介護する意識とされる意識-男女差が大きいのはどちらの意識か-. 関西大学社会学部紀要, 39 (3), 103-121, 2008.
- 17) 藤崎宏子: 要介護老人の在宅介護を規定する家族的要因-分析枠組の検討-. (特集: 高齢者の都市環境と生活文化). 総合都市研究, 39, 61-83, 1990.
- 18) Rodgers B.L.: Concepts, Analysis and the Development of Nursing Knowledge: the Evolutionary Cycle. *Journal of Advanced Nursing*, 14, 330-335, 1989.
- 19) Rodgers B.L.: "Concept Analysis: An Evolutionary

- View.” in Rodgers B. L. & Knafel K. A.: *Concept Development in Nursing: Foundations, Techniques, and Applications, 2nd ed.*, Philadelphia, PA: Saunders, 77-102, 2000.
- 20) Rodgers B.L.: Exploring Health Policy as a Concept. *Western Journal of Nursing Research*, 11 (6) , 694-702, 1989.
- 21) Maben J. & Macleod Clark J.: Health Promotion: A Concept Analysis. *Journal of Advanced Nursing*, 22, 1158-1165, 1995.
- 22) Lene Symes: Post Traumatic Stress Disorder: An Evolving Concept. *Archives of Psychiatric Nursing*, 9 (4) , 195-202, 1995.
- 23) 谷垣静子, 佐藤卓利, 小松光代, 他4名: 中高年のサクセスフルエイジングに向けた準備行動－介護意識と老後に向けての対処行動－. 京都府立医科大学医療技術短期大学部紀要, 10 (1) , 107-113, 2000.
- 24) 唐沢かおり: 高齢者介護サービス利用を妨げる家族介護者の態度要因について. *社会心理学研究*, 17 (1) , 22-30, 2001.
- 25) 杉澤秀博, 深谷太郎, 杉原陽子, 他3名: 介護保険制度下における在宅介護サービスの過少利用の要因. *日本公衆衛生雑誌*, 49 (5) , 425-436, 2002.
- 26) 實金栄, 太湯好子, 近藤理恵, 他2名: 日本とドイツの大学生の家族内資源と介護意識の社会化の関係. *岡山県立大学保健福祉学部紀要*, 18, 1-10, 2012.
- 27) 柚井孝子: 家族の変化と老人介護の将来. (特集: 90年代の家族と社会福祉実践), *社会福祉学*, 32 (1) , 16-36, 1991.
- 28) 高橋佳代: 生粋県人と途中転入者との介護意識の差異. *Health Sciences*, 18 (3) , 178-185, 2002.
- 29) 高橋佳代: 大学年齢層の学科専攻別の介護意識と社会的態度について～福祉学生と看護学生の比較調査から～. *明治学院大学社会学部附属研究所年報*, 33, 137-148, 2003.
- 30) 高橋佳代, 井上修一: 福祉学科女子大学生の介護意識－他学科女子大学生との比較－. *人間関係学研究*, 大妻女子大学人間関係学部紀要, 17, 101-111, 2015.
- 31) 冨江英俊: 地方国立大学生の「親の介護」意識と地元就職との関連: 「イエ」意識に焦点をあてたインタビュー調査からの分析. *人間教育と福祉*, 8, 75-88, 2019.
- 32) 中沢寿井, 板鼻邦子, 荒井節子: 介護者の介護意識に関する報告. *ゆきぐに大和総合病院医報*, 7 (1) , 9-11, 1993.
- 33) 黒岡有子: 病院職員にみる介護意識. *医療・福祉研究*, 9, 21-23, 1997.
- 34) 寺島喜代子, 吉村洋子: 看護学生と保護者の家族観・介護意識についての研究. *福井県立大学看護短期大学部論集*, 9, 83-96, 1999.
- 35) 青柳育子: 高校生の介護意識に関する研究－一般高校生と介護を学ぶ高校生の意識の比較から－. *日本生涯教育学会論集*, 31, 93-101, 2010.
- 36) 市森明恵, 大下真以子, 北島麻美, 他8名: 男性介護者が抱く排泄ケアへの抵抗感と排泄ケアの実施を受け入れる思い. *日本地域看護学会誌*, 6 (2) , 28-37, 2004.
- 37) 新村出: 広辞苑第七版. 岩波書店, 2018, p.1421.
- 38) 荻野朋子, 多喜田恵子, 大平政子, 他2名: 看護学生の介護意識と社会的態度に関する研究. *名古屋市立大学看護短期大学部紀要*, 10, 141-148, 1998.
- 39) 平松喜美子: 介護者のストレス認知・評価に影響する介護規範意識と男女平等役割意識. *看護・保健科学研究誌*, 5 (2) , 101-110, 2005.
- 40) 米沢ゆん, 古城幸子: 看護学生と親の老親介護意識の比較. *インターナショナルNursing Care Research*, 10 (2) , 85-92, 2011.
- 41) 山口直子, 滝沢亜矢, 翠川郁代: 息子介護者が母の排泄ケアを継続できた要因～介護を終えた息子介護者の思い～. 第39回長野県看護研究会論文集, 15-18, 2019.
- 42) 石川 周子: 家族に対する介護意識－男性介護職員の意識調査から－. *家庭科教育*, 75 (7) , 19-23, 2001.
- 43) 唐沢かおり: 家族メンバーによる高齢者介護の継続意志を規定する要因. *社会心理学研究*, 22 (2) , 172-179, 2006.
- 44) 村上実央, 長山萌, 高橋真秀, 他5名: 看護学生の介護意識の特徴－一般学生との比較－. *北海道公衆衛生学雑誌*, 30 (2) , 113-122, 2016.
- 45) 斉藤基, 佐々木かほる, 宮城重二: 中年夫婦間における介護意識に関する研究－親との同別居・親の配偶関係・健康状態との関連－. *女子栄養大学紀要*, 31, 121-131, 2000.
- 46) 高木修, 田中泉: 高齢者在宅介護における援助授受の実態と介護意識の解明－在宅介護に及ぼす家族形態の影響について－. (特集: 家族や地域社会における人間関係に見られる倫理観・価値観の変化). *関西大学社会学部紀要*, 35 (2) , 91-146, 2004.
- 47) 助川鶴平, 堀口淳, 伊賀上陸見: 老人に対する同居家族の精神身体評価と介護意識. *臨床精神医学*, 25 (3) , 345-355, 1996.
- 48) 松岡英子: 在宅要介護老人の介護者のストレス. *家族社会学研究*, 5 (5) , 101-112, 142, 1993.
- 49) 青柳育子: 高校生親子の介護意識と介護学習に関する検討－A高校の親と、昨年調査の高校生の意識から－. *日本生涯教育学会論集*, 30, 111-117, 2009.
- 50) 平岡敬子, 大藪マティス直子, 鈴木玉緒: 高齢者介護に関する日米学生の意識差. *社会情報学研究*, 12, 17-25, 2006.
- 51) 齊藤 ゆか: 家族の介護意識はどうつくられるか. *生活*

- 経営学研究, 34, 52-54, 1999.
- 52) 鈴木英子, 丸山昭子, 原田亮子, 他1名: 利用者主体に関する意識の実態とその関連要因に関する研究. 日本保健福祉学会誌, 7 (2), 73-79, 2001.
- 53) 平松喜美子, 長澤 順子, 寺田伊都子, 他1名: 介護者のストレス認知に影響を与える介護の規範意識. 米子医学雑誌, 54 (6), 185-191, 2003.
- 54) 渡部洋子, 加藤文子, 熊本さとみ, 他1名: 要介護老人介護者の介護継続意志に影響する要因. 日本看護学会論文集, 老年看護, 36, 189-191, 2006.
- 55) セゾン総合研究所: 介護実態と生活の変化－転換期にある介護環境・介護意識調査－ (特集: 高齢社会と食生活). 食の科学, 302, 43-50, 2003.
- 56) 青柳育子: 高校生の介護意識の実態と課題－高等学校3校のアンケート調査から－. 日本生涯教育学会論集, 29, 163-170, 2008.
- 57) 安勝熙: 高齢者介護意識に関する一考察. 社会学論叢, 175, 31-51, 2012.
- 58) 石井京子: 年代および介護経験の有無からみた高齢者介護意識の研究. 病院管理, 33 (4), 317-323, 1996.
- 59) 渡辺美鈴, 河野公一, 谷岡穰, 他5名: 大都市近郊 (高槻市) の要介護老人の介護者の状況と介護意識に及ぼす要因について. 厚生指針, 41 (2), 30-37, 1994.
- 60) 内藤長男, 井手三郎, 松鶴甲枝: 痴呆性老人に対する介護意識の因子分析的調査研究. 聖マリア学院紀要, 12, 3-9, 1997.
- 61) 木田文子, 武藤裕子: 学生の介護意識と介護の社会化－時系列調査から－. 静岡福祉大学紀要, 3, 81-86, 2007.
- 62) 唐沢かおり: 高齢者介護における人間関係と精神的健康. 日本行動医学研究 (特別講演), 14, Supplement, S18-S19, 2008.
- 63) 倉形喜美枝, 美ノ谷新子, 梅津美香, 他4名: 就労男性の介護意識調査からみた介護教育の検討. 第28回日本看護学会集録, 老人看護, 227-229, 1997.
- 64) 寺島喜代子, 吉村洋子: 壮年期世代がもつ介護意識についての研究－親に対する介護意識と自分自身の介護希望－. 福井県立大学看護短期大学部論集, 10・11号, 55-66, 2000.
- 65) 増井金典: 日本語源広辞典, ミネルヴァ書房, 2011, p.244.
- 66) 同上(65), p.499.
- 67) 同上(37), p.2060.
- 68) 中西泰子: 有配偶女性の就労と妻の親への介護意向－別居子の意識とその規定要因－. 老年社会科学, 32 (4), 413-421, 2011.
- 69) 檜垣巧: 日本と韓国の祖先崇拜. 密教文化, 1984 (145), 1-33, 1984.
- 70) 宣賢奎, 住居広士: 儒教文化における介護の思想－東アジア版介護の心の創造－. ケア研究, 4, 21-30, 2004.
- 71) 萩原清子: 高齢者虐待の発生と親孝行文化. 関東学院大学文学部紀要, 114, 127-145, 2008.
- 72) 内閣府: 平成29年高齢者の健康に関する調査結果 (概要版), [インターネットOn line], [2021年11月] https://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h29/gaiyo/pdf/sec_2_2.pdf
- 73) 藤崎宏子: 中年期女性の世代間関係と介護. 語りの地平ライフストーリー研究, 6, 51-72, 2021.
- 74) 斉藤基, 中西陽子, 佐々木かほる: 中高年の福祉サービス活用意識に関する研究. 日本看護科学会誌, 17 (3), 448-449, 1997.

**Concept Analysis of Attitudes Toward Care for Biological Parents
- Using Rodgers' Evolutionary Method -**

Satsuki MAKABE¹⁾, Yuki YAJIMA¹⁾, Katsuko OKIMOTO²⁾

1) Department of Nursing, Faculty of Human Health Sciences, Niimi University, 1263-2, Nishigata, Niimi, Okayama, 718-8585, Japan

2) Department of Nursing Science, Faculty of Health and Welfare Science, Okayama Prefectural University,
111, Kuboki, Soja, Okayama, 719-1197, Japan

Summary

The purpose of this study was to analyze the status of using the concept of “KAIGOISHIKI: attitudes toward care” in Japanese research on family caregiving, focusing on how children recognize and attach meaning to care for their biological parents, and to clarify its components as a basis for further developing nursing knowledge. With the keyword “KAIGOISHIKI: attitudes toward care”, 52 research papers were identified in major domestic literature databases. Through concept analysis of these papers using Rodgers' evolutionary method (2000), children's “attitudes toward care” for their biological parents were classified into 5 attributes: [affection], [duty/responsibility], [gratitude], [anxiety about the approval of others], and [expectation of care for oneself in the future]; 3 antecedents: [personal background of the child], [family history/relationships], and [influences of the living environment]; and 6 consequences: [aiming at home care], [having psychological resistance to and refraining from using welfare services for the elderly], [adjusting one's work to prioritize caregiving], [supporting the parent's will to continue care], [influences on the physical and mental health of the caregiver], and [experiencing mental conflicts when unable to care for the parent]. Based on the results, this paper defines the concept of “attitudes toward care” at the present time from the perspective of recognition of care for biological parents and attaching meaning among children, and presents a model case in which such attitudes were expressed.

Keywords: kaigoishiki, attitudes toward care, concept analysis, Rodgers, biological parents, children